

## 逆光・現在・逆言：パウル・ツェランの位置

江藤，正顕  
九州大学大学院比較社会文化学府

<https://doi.org/10.15017/4494436>

---

出版情報：比較社会文化研究. 2, pp.13-24, 1997-10. Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：

# 逆光・現在・逆言

## — パウル・ツェランの位置 —

江藤 正頭

### 【要旨】

ドイツ系ユダヤ人としてルーマニアに生まれたパウル・ツェラン（一九二〇—一九七〇）は、第二次世界大戦中、ナチの強制収容所に両親を失った。パリに住むようになってからも、文字どおり彼の「母語」になったドイツ語によって詩作し続けた。みずから詩を書くとともに、シエイクスピアをはじめ、ヴァレリー、ミシヨール、エセーニン、マンデリシュタムなど各国の詩を翻訳したポリグロット（多言語者）でもあったが、それにもかかわらず、その詩作においては、彼は、あくまでもドイツ語に固執しつづけたのである。

ツェランがこだわり続けたのは、あらかじめ普遍へと開かれたコミュニケーション手段ではなく、むしろそれとは逆に、その固有の世界をどこまでも閉ざすものとしてあった。そのため、彼が発する、ほとんどモノローグの断片のような詩は、それがドイツ語とはもはや呼べないところへと晦渋を極めていく。ここではドイツ語という共通の基盤の上で詩作することはすでに否定され、発語は、必ず「ドイツ語とは何か」という緊張を伴って、投げかけられる。だが、そうした彼の詩作のなかに姿を現してくるのは、思いがけず聞かれる未知の言葉、もはやドイツ語とは呼べないような、未踏の言葉との出会い（Begegnung）なのである。

本論では、パウル・ツェランの詩を、「場」「時」「無」におけるアポリア、しかも積極的な契機ともなっていくようなそれら四つのアポリアの諸相から捉え、彼の詩的位置あるいは動態を見極めようと試みる。

### 一、場のアポリア

「誰／誰だったのか、あの／種族は、あの虐殺された、あの／黒く空に立っている性器は—／陰茎と睾丸は—？」（陽根、子宮）『非在者の薔薇』<sup>1</sup> 言葉がそこに在るといっただけで、ひとつの世界もまた確かに存在すると信じられる人間だけが詩人たりうるのかも知れないが、現代では恐らく、いかに逆説めいていようと、詩人は必ずや言葉への不信から出発せざるを得ない。この和解し

難い矛盾を矛盾のまま、断絶のまま背負い込まざるをえないところに、現代という時代が詩や詩人というものを容易に在らしめない理由がある。渦動する言葉のその激しい攻防と、さらに駆け引きの中にあつて、そしてこのような大上段に振りかざすような言い回しそれ自体が拒まれながらも、しつこく反復を要求されているというところに、このいわば反時代的課題は立っている。ツェランは言う。「詩における二国語性をわたしは信じません。二枚舌—確かにそれは、同時代のさまざまな言葉の芸術

や芸当の中に存在します。とりわけ、そのときどきの芸術消費に嬉々と応じて、多国語的にも多彩的にも身をあやつることのできる言葉の芸術や芸当の中に。詩は—運命的に一回的な発語です。つまり—この自明の理を申し上げることをお許し下さい。というのも詩は今日、真実同様、あまりにもしばしば、この自明さを失って自滅しているのですから—つまり、二回的な発語ではありません。」（「フリンカー書店主のアンケートへの回答」一九六一）<sup>2</sup> おそらく、人間がその生存を持続していく限り、

詩を書くという、いわば原始的な、しかし「丁寧さがそもそもそうであるように、あらゆる詩作の前提で」あると同時に、「奈落や深淵」でもありうる「手仕事」もまた保持されていくに違いないが、それにしても今日、なお言葉の（暴力性）（根源的力）を失わず、かつ破綻につぐ破綻を恐れず、詩が書かれなければならない根拠を探し求めることは、例えば、何故この「ワタシ」は死なないで生きているのか、という問いに答えようとするのにも似て、困難で馬鹿げていよう。「この手仕事が金色の基盤を持たないことは明白ですーそもそも基盤などというものを持つかどうかさえ、定かではないのです。」（ハンス・ベンダーへの手紙 一九六二）この問いへの最良の回答は、あるいはその問い自体を笑い飛ばすか、黙殺してしまうことであるかもしれない。しかし今しばらくはまさにこの〈何故〉を忠実に辿っていく以外には、詩の書かれるべき根拠には近づきことができないのだ。ツエランは書く。「おそらくぼくはこのすべての者、たつたろう」（何故この不意の帰郷、ただ中から、ただ中へ）『雪の声部』<sup>1</sup>

戦後詩を語るにあたって、必ずと言っていいほど引用されてきたアドルノの「アウシュヴィッツのあとに詩作することは野蛮だ」という言葉は、その後、ツエラン詩の衝撃を受けて訂正に至るが、その『否定的弁証法』第二部「模型」第三章「形而上学」の「越年の苦しみに、拷問を受けた者が呻くように、表出の正当性がある。だから、アウシュヴィッツのあとに詩を書くことは不可能だと言ったのは誤りだったかもしれない。」との言も、なお依然として外在的なものに聞こえる。それならばいつそ前言を撤回せず、ドイツ語で詩作することを拒否せず、それをいわば「アウシュヴィッツ」化したツエランに倣って、ツエランの「野蛮」こそを掘り返すべきだったのではないか。現代における詩の困難さ、それは詰ま

る所この〈何故〉と等身大のところまで詩が縮まらざるを得ない、あるいは拡がらざるを得ないことに由来している。「わたしたちは暗い空のもとに生きています。そしてー人間と呼べるものは僅かしかいません。おそらくそのために詩の数もこんなに僅かなのでしよう。わたしがまだ抱いている希望は大きいものではありませんーわたしはわたしにまだ残されているものを維持しようとするだけです。」（ハンス・ベンダーへの手紙 一九六二）このすてにして不穏な響きをもつ言い方は、すぐさま誤読にさらされるだろうが、しかし彼は、その「希望」の危うさを生きるほかはない。詩というものがそもそも無かったほうが良かったのかも知れぬ、という途方もない疑念や、詩の最後の理想は自らが死滅することではないか、という早まった帰結が頭を掠めようと、ちょうど肉体というものが現実から堰止められている限り死があくまで空想の中でしか浮遊できないように、そしてまたそれはついに空想以上にはなり得ないように。「おまえの言葉の光の風に／灼きはらわれた／体験の色とりどりの饒舌ー百枚ー／舌のわたしの偽ー／詩、非詩。」（灼きはらわれた：）『息の転回』ツエランにとつて、取り返しがつかない状態で在ってしまった生の如く、詩にとつてもまた、未だ自死は許されてはいないのである。「手、棘の／言い奇られた傷、響く、／手、無、その海、／手、えにしだの光の中に、その／血の帆船が／きみに向かって迫る。」（プルターニユのマチエール）『言語の格子』詩は絶えず現実の堰を切つて溢れ出たがっついていて、その未だ果たし得ぬ夢を充滿させている。ツエランは〈狭き〉にこそ固執する。大海から逆流し限りなく細い支流へとフィギュレイトしていく。「芸術を拡大する？／いや、そうではありません、そうではなくて、芸術とともにひたすら君自身のせまさのうちへ入れ。そして君自身を解釈せよ、です。／わたしは、ここ、みなさまの面前にお

いても、この道をたどりました。その道は円環をなしていました。／芸術、つまりメドゥーサの首でもあれば自動機械でもあるもの、無気味で容易に見きわめのかななもの、結局のところ一つの疎ましいものにすぎないかもしれないもの、芸術は、生きつづけます。」（子午線ゲオルク・ビュヒナー賞受賞の際の講演 一九六〇）だが、そのパウル・ツエランの詩から受ける印象は、どこまでも繊細に、言葉の表皮をみずから剥ぎ取り、外気に曝された神経繊維の痙攣するような感覚であるのみならず、また、澱んだ不快と苛立ちでもあるように、それを振り払って他のどんな感情にも行き着くことを許さないにも拘らず、同時にそこに留まることもまた許さない、というようなものである。「吃りなぞられる世界、／その傍らでわたしは客であったことになるだろう、／壁から汗のように滴り落ちる、ひとつの名、／ひとつの傷がそこを舐めのぼる。」（吃りなぞられる世界：）『雪の声部』そして舞い降りてくる骨灰のように読者の内部を幽かな波紋とともにゆつくりと沈殿していく。「わたしは聞いた、水の中に／一つの石と一つの輪があると、／水の上には言葉があり、／それが石のまわりに輪を描かせていると。」（わたしは聞いた：）『閩から閩へ』それは、夢のなかで何かから逃れようとするのだが動けないときの感覚にも比量される。「そしてお前たち、お前たちあわれなものたち、お前たちは立っていない、咲いていない、お前たちは現存しない、そして七月は、いかなる七月でもない。」（山中の対話 一九六〇）詩人というものが多かれ少なかれその裡に暗闇を抱き込んでそれを有て余してしまっているものであるとすれば、ツエランとは、紛れもなくその暗黒を所有してしまつたひとつの魂である。そして他者をもその深い闇の淵に吸い寄せる彼は、だが誰にもまして自らの闇の前に立ち竦むものであった。彼は闇に引き込まれそうになりながら、

そこから激しく身を反らすことによつて辛うじて立つ。「心は闇の中に隠されていた、そして硬く、賢者の石のように。」(「逆光」)そしてその姿勢ゆゑに彼の(「生」というものは、すでに死んでしまつた(「生」)あるいはまだ生き続けている(「死」)とでもいう他はないように、居座ることもまた許さないために、この出発のない出発をずっと繰り返さなければならぬのである。ツェランは語る。「わたしたちが事物たちと語るとき、わたしたちはつねにそのものたちの「どこから」と「どこへ」をも問ひかけているわけですから、これは、「未解決にとどまつている」「決して終ることのない」問ひかけ、そして、ひらかれたもの、うつろなもの、はてしないものを指向する問ひかけです—わたしたちははるか外へ出てしまつていきます。／詩もまた、この場所を求めると、と思ひます。」(「子午線」)そしてさらにこう言つてゐる。「では、そうすると、像(イメージ)とは何でしょう?／一度だけ、ただの一度だけ、しかもいまとここにおいてだけ感じとられるもの、感じとられるだろうもの。したがつて、詩とは、あらゆる喩(トローペ)やメタファーが不条理に(アト・アプズルドウム)に運用される場所であるでしょう。」<sup>15</sup>パウル・ツェランは、その誤植の多さのために、後に自ら破棄した処女詩集『骨壺からの砂』以来、詩以外はほとんど残すことなく、一九七〇年四月、セーヌ川に投身した。その彼の(「死」)に手を掛けて引き戻すことは最早「絶対」的に不可能であり、ただ彼にまつわるひとつの観念としての(「死」)を巡つて憶測するのみである。この小論は、主としてその死に最も近く出版された詩集『光の強迫』やその他から数篇の詩を手掛かりに、ツェランの内的な位置を推し量ろうとするものである。そしてその位置は、(本名)アンチエルと(筆名)ツェラン、すなわち Ancel / Celan の、その断層面を「鋤き返す」ことによつてはじめて開かれるだろう。そこにはドイツ

語化されたアウシュヴィッツではなく、また、もはやアウシュヴィッツ語化されたドイツ語でもなく、その選び取つたドイツ語を再びドイツ語自身に投げ返すツェランの詩の切／合の果ての光景が予期される。自身にとつて(ドイツ語)とは何か、というように。

## 二、時のアポリア

パウル・ツェランの死は、パリにおいて、ほとんど不慮の事故と見紛うようにして遂げられた。その密やかさは、恰かも払い除けても払い除けても覆い被さつてくるような、渴望と虚無とが同居した貌をもつ。凝つと闇を覗き込み、そこへ吸ひ込まれていく恐怖(それはまた願望でもある)を抱きながら、それに対して激しく抗うことで彼の詩が辛うじて成立する。ツェラン詩において、渴望と虚無とは同一のものの逆方向への発現形式であり、その虚無の裡には跳躍の構えが、そしてまた渴望の裡に深く横たわる暗黒が窺ひ知れよう。だが、そのような言い方でいつたい何を言つたことになるのか。実際、彼が擱もうとしていたものは、そのような言い回しの端からとめどもなくこぼれ落ちていく世界なのだ。彼にとつて、(アポリア)とは、限りなく「言葉」と「物」の關係を見直しつづけ、そこに「ポエジー」を発見することそのものを意味している。問題は彼と彼の詩をアンビヴァレントな相において理解することではなく、その(アポリア)が(アポリア)として立ち上げていく過程を認めることである。そしてそのとき(アポリア)の質も変化している。そのように考えるとき、ツェランが幾度もこだわつた「逆」(Gegen)ということが、彼の世界認識のしかた自体を解き明かす鍵となつていく。

確かに、ツェランが強制収容所において終生治療不能なほどの(トラウマ)あるいは第二の(割礼)を心に

受けたことは十分に考え得ることであるし、また彼の詩のほとんど全てがその傷口を水源として滲み出てくることも否定し難いことである。彼と同様ルーミアア出身のユダヤ人彫刻家(彼には鋭く流線化した鳥の作品が多く存在する)にちなんだ詩がある。「もしこれらの石のひとつに／それを押し黙らせているものを、語らせるならば—／この老人の松葉杖の、ここに、すぐ傍らで、／傷のように、開くだろう。」(「ブランクーシ宅で、二人で」『光の強迫』)経験というものはどんなに微細であれ、こちらの意思に拘らず暴力的に侵入してくる何かであり、あるいはその得体の知れぬ暴力にまつわるものだけが「経験」となり得る。またどのように圧倒的な経験も絶対的ではあり得ないように、どのように微細なそれもその根源と究極へといざなうのに不十分であるということはないのである。ツェランは収容所に家族を失い、同胞を失い、しかも自身の(「死」)の確実な射程にある、いつた時間を経験したのである。彼は強制労働を強いられる。「誰が無を鋤き返すのか?／彼が。今度は。／耕されないまま／彼の土地は彼の太陽の／夜々の感覚の中に立つている。／彼はぼくらを名づける。／／そう、彼は日雇い人夫のように働く。／そう、彼は是認する、彼は泥を捏ねる、／おまえが精錬するものを／坑口で／坑内で／坑外で、空しく、原石に抗つて、／最も深いところで、／生きながらに。」(「誰が無を鋤き返すのか?」『雪の声部』)そしてその最も迫り詰められた場所であらざるユダヤ人どうしの不信や憎悪を見、あるいはまたツェラン自身が深くそのような事態に関わつてもいたに相違ない。だが、彼のなかでこの掘削は、現実の行為から、より抽象的な意味あいを帯びたものになつていく。「絶滅」が、また「無」が深く影を落とす。「ぼくは聞く、鉞が咲いたと、／ぼくは聞く、その場所は名づけられないと、／／ぼくは聞く、絞殺される者を／見つめるパン



が、／彼を癒すと、その妻が焼いてやつたパンが、／ぼくは聞く、彼らは生を／唯一の隠れ家と名づけると。」  
 「ぼくは聞く、鉞が咲いたと…」『雪の声部』<sup>①</sup> ツエランの暗闇の発端には民族の〈シヨアー〉（絶滅）に対する激昂や呪詛に先行して、人間がその極限で取らざるを得ない存在形式、またそれに抗し得ず崩れ去った自身の心に対する暗い恐怖感がある。再び地上に戻って来た彼は、そこに茫然と広がり、自身との何の連関も持ち得ないような時間の砂漠を歩き出さねばならなかった。「昏れていった裂片の罅、／脳髓の流れの／向こうに、／／うねりのかなたの堤防、／そこで罅は行き止まる。」（「昏れていった…」『雪の声部』<sup>②</sup>）はや「後刻」を失ってしまった人間にとって、世界とはいったい何であるのか、そしてその眼にどのように映るであろうか。次の詩は彼の内部光景を象徴的に示す。

Kein Halbholz mehr, hier, / in den Gipfel hängen,  
 / kein mit- / sprechender / Thymian. /  
 Grenzsnee und sein / die Pähle und deren /  
 Wegweiser-Schitten / auschorchender, tot- /  
 sagender / Duft. ("Lichtzwang")

断ち割られた木はもはやなく、ここ、／頂きの斜面には、／ともに／語らう／立麝香草もない。／境界の雪、そして／杭たちとその／道しるべの影に／聞き耳をたてている、死を／告げている／かおり。  
 （「断ち割られた木はもはやなく…」『光の強迫』<sup>③</sup>）

風景は色褪せ、響きは遠退き、そこにツエランは息をつめて立っている。「それぞれの丘の上に／その今日へと連れ戻されて／啞へと滑り落ちたひとつの私―／一本の杭」（「帰郷」『言語の格子』<sup>④</sup>）凝つと動かず、感覚器を

何かに対して鋭く集中しようとする。「杭たち (die Pähle)」の遥か遠くにあの収容所が、死者の墓標が幻想される。「境界 (Grenz)」それはツエランが死を逃れた故郷チエルノヴィッツ（現、チエルノフツィ）近郊、ルーマニア国境であるのかも知れないが、同時に彼の内部をその果てまでも暗く横切るものだ。「境界」は生者と死者とを厳然と隔て、死者は生者に向かって〈何故〉と問い詰める。「境界」にあつて死者の声に耳を澄ます彼は、問うものであり問われるものであり、それゆえにまた、〈死〉を死に切ることも〈生〉を生き切ることも

からも見放されたような場所に隔てられている者かも知れない。彼の中で、欠如感と飽和感は混濁する。彼は方向のない時間のなかに立ちつくし、ただ吐息のように発語される〈何故〉だけが冷気のなかに慄えている。それは限りなく負性を帯びたものでもあるが、しかしそれはツエランにとつて、思いもかけない認識の罅に連れ出すものともなっているのである。「ユダヤ人と自然、それは別々のものだ、いまなお、今日でも、ここでも」（『山中問答』Ⅲ、一六九）、つまりユダヤ人には国もない、自然もない、世界もない、あるのはそういう言葉だけである。そのようなツエランのコトバに、いよいよ自然現象が結晶して行く。ツエランは偉大な植物愛好家であり、地質学に没頭し、その古層に分け行つていく。<sup>⑤</sup>「無国籍」言語、無「民族」言語、無「語族」言語へと向かつて、ツエランは密やかに、しかしこの上なく不穏なコトバの〈原爆〉を製造し続ける。この一見、静寂に包まれた詩篇も一旦分裂／融合を起こせば、閃光を放ち炸裂する巨大なエネルギーとなる。未来に対して〈千年の楔〉を打ち込むのだ。あるいは千人針で縫い付けられたキルトのように。〈愛〉のように。ここでは、営みのすべてが独語／毒語の超ドイツ語的〈詩作〉に向けられる。そして祈りと呪いとは、一体のように超高速で回転す

る。過去は記憶され、いく。

Merkblätter-Schmerz, / beschnit, überschnit:  
 / / in der Kalenderlücke / wiegt ihn, wiegt ihn /  
 das neugeborene / Nichts. ("Lichtzwang")

備忘録のいたみ、／雪に埋もれ、雪に閉ざされ―／曆の隙間で／痛みを秤る、痛みを揺る。／あらたに生まれた／無きものが。（「備忘録のいたみ…」『光の強迫』<sup>⑥</sup>）

時が凍てつき、「無きもの」(Nichts) が主人となつて内部から食い尽す日常というものはツエランにとつて何であつたか。ただそこに居るから居るのだ、という居直りにも似た「同語反復」を彼はきつぱりと言いつつ切ることができたか。その「同じこと」に対し、魂の底の方から〈否〉という声が這いのぼつてはこなかったか。「ぼくら深さのかなたに住む者たち／氷結したところに、孤独に。／それぞれの懸崖の谷が一本の睫毛を／眼の複製と／その石の核のもとへ／運び寄せる。」「ぼくら深さのかなたに住む者たち…」『雪の声部』<sup>⑦</sup> 人間というものが多かれ少なかれ自身の身体や意識に異和感を内在させながら、にも拘らず日常を営むことができるのは、実に、生理そのものが本来なし崩し的であるからではないのか。ツエランは当初医学を専攻していたことにもよるのか、その詩は解剖、内分泌、循環器、あるいはまた生理学、免疫学、遺伝学等々の用語に浸潤され、まるで染色体の微細な運動のようにその繊毛を繰り出す。が、もしこの中和状態を逸脱し、あの原始的な異和感の方向を極度に追い詰めていくなれば、鼓動や呼吸すらもまさに自然的である故にこそ怖ろしく、不愉快なものに変わってしまうであろう。「時が、／強められ、君の奥で止まる、／君は

語る、／君は立つ、／比喩にすぎない使者を／硬く引き締めながら／声にあつて／素材にあつて」(『プレイ・タイム』『雪の声部』<sup>23</sup>) 事後承諾的な生理の裏側にべつたりと吸いついている不吉さの影をどうしたら拭い去ることができるのか。(何故) という問いは遂に不毛で不可能であるしかないのか。熟しきつた習慣のように死ぬまで生きていくという状態は本当は怖ろしいことではないのか。ツエランの内部にはこのような妄執にも似た思念が眩暈のように湧いていたに違いあるまい。が、ツエランはそのような場所に自足的に佇まない。それをさらに打ち砕く言葉の現勢。言葉の蘇生。「詩は、おのれみずからの縁において自己主張するものです、それは、なおも存続しうるために、みずからの「もはやない」からみずからの「なおまだ」へたえずみずから呼びもどし連れもどすものです。／この「なおまだ」はただ一つの語りかけであるかもしれませんが、つまり、単なる言葉ではなく、ましてやおそらくは、言葉からの「語呂あわせ」などでもないのです。／そうではなく、現実のものとなつた言葉、ラディカルではあつても同時にまた言葉によつて画される境界や言葉によつてひらかれる可能性を規約しつづける場所の個人的なしるしを帯びた、解き放たれた言葉なのです。」(『子午線』<sup>24</sup>) 死者でもなく生者でもない男が、同時に今度は、死者でもあり生者でもある男として、そこに立っている。「あらたに生まれた無きもの(das neugeborene Nichts)」とは「いたみ(Schmerz)」そのものであり、そして「痛み」というものが決して論理では包含できないように、「無きもの」もまた論理から、あえて言えば、倫理の水準に現れざるを得ない。なぜなら「無きもの」はそれ自体では何も言い表さないからである。ツエランの詩は、記録的なものからにわかに記憶的なものへ、すなわち意志的で、倫理的なものへと様相を変える。ただしそれは時間の推移によつてではな

い。「湿原台地、おまえが泥炭になる時、／わたしは正義者の／時計の針を外す。」(『湿原台地』<sup>25</sup>) 『雪の声部』<sup>26</sup> 地上では生者が、死者を裁くのは自分たちの特権だと言わんばかりに、その論理をもつて意味づけて処理していく。死者は都合よろしく生者の秩序の中に分解され解消された警句、無意味な死であつた、という一句のもとに忘却される。だが、ツエランにとつては、死者を生者の中に位置づけることは、即ち、死者の重力を担い切ること、死者の沈黙を沈黙として耐えることへの決意に他ならず、そしてそのことは彼が「もつとも主張のない詩」へ向かおうとする根拠にもなっている。「詩(ホエジー)はもはやみずからを押しつけようとするものではなく、みずからを曝そうとするものである。／一九六九年三月二十六日」ツエランは、主張という一見ラディカルに見えて、その実世界への暗黙的和解のスタイルを厳しく拒む。それこそ死者と生者とのなし崩しの癒着であるからである。「一九五二年、詩集『罌粟と記憶』に収められてから大きな反響を呼んだ詩「死のフーガ」は、すでにさまざまな誤解・誤認に曝され、教科書に採用され、ついにはドイツの過去清算のひとつのアリバイとして整合性のあるように翻訳されるまでにいたつた。その結果、詩人はこの詩を六〇年代の自作の詩朗読会のプログラムからいつさい外すとともに、詩をますますそのようなアリバイに必要な翻訳の可能性から過激に追いやって行く。」(金子、前掲書)<sup>27</sup> そしてただひたすら死者の呪いとも噛いともつかない幽かな声に耳を澄ましていたのである。「爆薬が／お前に微笑みかける／現存在の凹みが／一枚の花弁を／それ自身から救い出す」(『石灰、クロツカス』<sup>28</sup>) 『雪の声部』<sup>29</sup>

### 三、喩のアポリア

ツエランの内部では時間の潮位でも言うべきものが異常に高くせり上がっている、という印象を与えはするが、実際はむしろ、時間はやや遅れがちに感受され意識されていたのではなかったか。「水門を／くぐらせて私は、／その言葉を海水のなかへ、もとへ／外へ、そしてかなたへと／救い出さなくてはならなかった」／イスコール(黙禱)「(水門を：)『非在者の薔薇』」過去に躓いたり、(死)の想念に支配された者に対して、時間はそのような訪れ方をする、と言うより、詩を書くという心の状態の中にすでに、過去へ遡行していき、そのため現在から乖離逸脱せざるを得ないような不可避の条件が内在しているからである。それを逆に、時間が迫ってくる、常に(現在)してくる、というような感覚で捉えられるのは、意識の時間化が滑らかに行われなためであり、言わば時間の遠近感覚が失われ、そのため意識が時間から突出してしまうからである。そしてその剥き出しになつた意識は棘の如き感覚として彼を終始刺戟し、時間の自然的経過の中に埋もれていくことを妨げる。ツエランはこの「痛み」の進むまでの静かな時刻、息を殺し、身を固くして待つ。彼の内部で、硬直して石になろうとする思いと、それを断ち切つて奔出しようとする思いとが闘ぎ合う。否、そうではなく、そのような理解の仕方ではなく、さらに刺が安息であるような意識の覚醒をめざそうとするのである。それはどこまでも直立し、かつ逆説的であるような死体・姿態・肢体でありつづけるようとする。「高炉の中の、／再度点火された火絨のもので、／陰茎のような移植脳へと／登り、永遠に(今日)化された、／傷の石が(明日)の坑外作業を迎える。」(『ルーン文字が刻まれた石もまた軌道を変える』<sup>30</sup>) 『雪の声部』<sup>31</sup> 「痛み」はその暗い意識の淵で、恰かも闇の中

に映し出される記憶の映像のように明滅し（いま）という表層に向かって逆遠近法的に尖り、強迫するのである。ツエランのとつて、光の恐怖と光の希求とは同根であり、光はその針先で意識の裏にさまざまな記憶を彫り刻み、腐蝕させ、さらに記憶はその傷口から滲み出して支流となり、脳髓を巡る。強制収容所、それはあらゆる記憶の終末でありながら、あらゆる記憶のゲネシスであり、その無数の切断された生の蠢く混沌は、逃れ難い呪縛でありながら、希求されるべき魂の原郷であったに違いない。「来た、来た。／ひとつの言葉が来た、来た、／夜を縫って来た、／輝こうとした、輝こうとした」（「ストレッタ」『言語の格子』）そして意識が記憶によって極微にまで刻まれていく果てに、暗黒が異常な光を発し、ゲネシスは再び不気味な明るさをもって輝く終末と重なるのである。

Wir lagen / schon tief in der Macchia, als du  
/ endlich heranklochst. / Doch konnten wir nicht  
/ hüberdunkeln zu dir: / es herrsche /  
Lichtzwang. ("Lichtzwang")

わたしたちは横たわっていた／すでに森林の深くに、あなたが／ついに這いよってきたとき。／けれどもわたしたちは出来なかつた／あなたのほうへ昏れていくことが／光が／強迫していた。（わたしたちは横たわっていた：『光の強迫』）

この詩においてもツエランの内的位置は微妙かつ象徴的出在る。何かを断定するや否やたちまち暗転して、そこに別の相貌が現れるという具合に、言葉の蔓が絡み合い、語の記号化や意味の整合化を許さないのである。「ヒュー、コロスノダ：：そう、いつ？／いつ、いついつ、／

凶器のいつ／そう狂気、―」「フーエディブル―」「非在者の蕃薇」その禁制は、ただ解釈というものが言葉に近づきつつある途上で、ふつと生まれた平衡状態に留まる、という自覚においてのみ僅かに解かれるに過ぎない。そしてそのとき転黒／光の試みもまたあながち無駄ではないはずだ。「わたしたち（Wir）」が再びここにおいても、あの生者と死者と、さらにすでに無き、あるいは未だ無き絶対者のあいだを反転するなかに、死者にずれ込み、かつ生者にずれ込みつつその境界の亀裂へと填るツエランが見えてくる。光とは、この「わたしたち」でもあり「あなた（Du）」でもあると同時に、その何れでもない亀裂こそ強迫してくるものであった。「逆光（Gegenlicht）」「逆言（Gegenwort）」によって（現在（Gegenwart））は吊し上げられ、延長される。更新されつつけるのだ。死者とも生者とも癒着できない故に、かえってその歪みが全て懸てくる場所としての亀裂空間にツエランは位置する。たとえその位置が自ら択んだわけではなく、現実が強い結果であったとしても、そこに位置しつづける決意は、ある振幅を伴って彼の内部に確かに喚起されたはずである。人間は生きようと意志して死ぬものでも死のうと意志して死ぬものでもあり得ず、ただ現実の可変性によって死から逸らかされたり、また生から追い落とされたりするだけであり、生きることと死ぬことは、ある地点からは生かされることと死なされることに転移して、彼の決意というものもその地点より向こうへは進むことができないのである。だが、まさにそこにおいて、彼の決意はその限界域に達する試みとなり、詩はその決意の表現となる。決意？ ツエランは、ハイデッガーをくだいほどに読み返し、そしてあろうことか彼に同化しようとしさえする。ツエランは、レヴィナスやデリダがそうであったようにはハイデッガー批判者の側には回らない。「永遠が境界の内にとどまる

―／軽く、その強引な／測量触手の中で、／思慮深く、／指の爪たちによって／透視できる／血糖―豌豆がめぐる。」「（「永遠が：：『雪の声部』」詩は、その内部時空間がその限界で現実時空間と突き当たる地点において初めて、それらの総体を根源的に突き動かしている或る無人称性に遭遇し、そこにその表現主体を同化せしめることが可能となるに違いない。「詩人は、詩がまぎれもない現実の存在となつた時、即座にそれまで彼がとらわれていた内部事情とのかかりから放免されるのです。」というツエランの手紙の言葉は恐らくこのようなことであろう。彼がハイデッガーとの出会い／すれ違いを記した「トートナウベルク」（Todtnauberg）という詩の中で語ろうとしたことも、とりも直さずそのことであつた。ツエランはその押し殺したような調子の裡に、アンゼルム・キーマーほど雄渾でも英雄的でも輝かしくもなく、またハイデッガーやデリダほど果敢でなく、それでいて遠くへ抜けていく細道を辿る。ツエランは言っている。「わたしはこの見解を今日ならたぶんもつと別な風に言いかえるか、もつと事細かに述べるかするだろうと思います、―しかし、根本においてはわたしは依然この―古い―見解の持主なのです。」（「ハンス・ベンダーへの手紙」）とはいえ、これは逆に考えると、彼がその「かわりから放免される」までは、ずっとその試みが持続されねばならないということにもなるのだが。光の強迫、それがたとえ彼の内部の全感覚を開放して、世界と直かに交感するような印象を与えるにせよ、彼が容易に神秘主義者になれないのは、自らが倫理の昏さともいふべきものを放棄しないためであり、詩の表現を表現自体の問題にすり替えないためである。「数えられないおまえ―／微ではないだけ／おまえはかれらすべてに先立っている／そしてその果てに彼は語る。」（「半ば食い破られた：：『雪の声部』」彼はさらに厳しく（覚醒）を微分す

る。「ドイツ詩の言葉はより醒めたものに、事実在即したのになりました。それは「美しいもの」を疑い、真実であろうとします。つまりそれは、いかにも当世風な多色性に目をとめながら視覚的な領域に何か言葉を求めることが許されるならば、「より灰色の」言葉、つまり、この上もなくおぞましいものと一緒に並んで多かれ少なかれ平気で鳴り響いていた、いわゆる「美しい調べ」とはもはや何ひとつ共通するものがない所に、とりわけその「音楽性」が据えられていることを欲する言葉なのです。／この言葉にとっては、表現につきものの多義性にもかかわらず、精確さが問題です。この言葉は美化せず、「詩化」せず、名づけ、設定します。この言葉は、所与のものや可能なものの領域を測定しようとしません。もちろんここでは決して言葉それ自体が、言葉そのみが働いているのではなく、いつもただ、輪郭づけと方向づけとを求めて、自分の存在の独特な勾配の下に語っている「私」が働いているのです。現実には存在しません。現実には求められ、獲得されるのです。」(『パリのプリンカー書店主のアンケートへの回答』一九五八)

Treckschienzeit. / die Halbverwandelten

schleppen / an einer der Welten. // der Enthöhe.  
gennigt/spricht unter den Stimmen am Ufer: /  
Todes quitt. Gottes / quitt. ("Lichtzwang")

曳航の時、／なかば変容していく者たちが曳く／  
世界のひとつで、／失墜した者が、ひそやかに／  
岸のひたいたちの下で唱える――／死をとかれ、神  
を／とかれて。(『曳航の時』、『光の強迫』)

再度ここにもあの亀裂空間が現れ、また暗転／光転の  
試みが続けられる。すなわち、「なかば変容していく者

たち (die Halbverwandelten)」とは誰か。「岸のひたい  
たちの下で (unter den Stimmen am Ufer)」とは何なの  
か、というように。死者の腐乱する肉体が色褪せる生者  
の記憶と重なり合い、「岸のひたいたち」に死者の山と  
生者の群れがダブり、「失墜した者 (der Enthöhe)」に  
ツェラン自身の影を見出す。この詩においてもツェラン  
の位置は、(属し) かつ(遮蔽されている)。「死をとか  
れ、神をとかれて (Todes quitt. Gottes / quitt)」と発  
するこの昏い私語は、大量殺戮の無名性のなかに忘却さ  
れていく死者と、まるで何ごともなかったかのようにそ  
こから遠ざかるようにする生者との亀裂空間を「ひそやか  
に (gennigt)」充たそうとする。カール・リープクネヒ  
トとローザ・ルクセンブルクを思わせる次の詩句。「男  
は蜂の巣状にされ、女は／浮かんではずだ、めす豚と罵  
られ、／自身の、誰でもないものの、すべてのものた  
めに――／ラントヴェーア運河はさざめかないだろう／  
何も／澱まない。」(『お前は横たわっている…』『雪の声  
部』) その声は内部へと向かって進み、沈潜していくな  
かで、次第に声帯の振動を失い、ただ呼吸音だけを残す  
のみとなる。それは自己消去願望のいがい逆説でもあ  
るかのように、記憶への(決意)を込めて唱え続けられ  
る声であり、その長く深い沈潜の極みで、彼の声は確か  
に、最も暗い場所から発語されるのである。「死をとか  
れ、神をとかれて」しまった彼にとっては忘却もまた許  
されてはいない。「時が来た、／脳の三日月大鎌が、き  
らめいて、／空を渡り歩く、／胆汁の天体をぞろり引き  
連れて、」(『時が来た…』『糸の太陽たち』)

堰とめられたツェランの内部を時間が次第に満たし、  
石になろうとする心を絶えず浸食していくように、すで  
に無い者たちの記憶がその内壁に執拗に刻み込まれてい  
く。「もうひとつの眼があるだろう、／見知らぬ、ぼく  
らの眼の／かたわらに、黙り込んで／石になつたまぶた

の下に。／さあ、おまえたちの横坑を掘り抜け！」(『確  
信』『言語の格子』) なぜ書くかという問いは、常に、な  
ぜ生きているのかという問いに密通し、それゆえ、詩は  
この問いの不可避性と不可逆性を同時にみつ限り、永久  
に懸垂状態を脱することは出来ない。ツェランにとって、  
言葉は、また自身のゲネシスに他ならず、ゆえに彼は言  
葉への不審に駆り立てられながらも、そこに拠って立つ  
他はないのである。ツェランは、ブレヒトの詩「あとか  
ら生まれるひとびとに」の第二部「なんとという時代―い  
まは／木々についての会話が、ほとんど犯罪に属する。  
／なぜなら、それは無数の非行について沈黙している！」  
(『野村修訳』) を裏返してしまう。「樹木のない、一枚の葉  
―／ベルトルト・ブレヒトのために、／何という時代  
だろう、／一つの対話がほとんど犯罪であるとは／それ  
ほど多くの言が含まれているために」(『一枚の葉…』『雪  
の声部』) 詩は暗闇の淵から訪れる言葉を内包し、自ら  
輝くことによって逆に暗黒を喚起する。中絶ではなく、  
持続のなかで非在へ向けて抛り投げられる宙吊りの罅。  
非在に向かつて開かれたひとつの賭けにして、絶えず語  
りかける状態にある。この「逆」(それは単なる「転倒」  
を意味しない)への転依によって詩人は暗闇の底に沈  
潜していく声を再び虚空へ放たなければならぬ。だが  
応答は果たしてあるのか。「アウシュヴィツの殺人者に  
対するワタクシ如き露出狂ノ葦からの唯一のお返しであ  
るにはちがいないものの、(今はじめてわたしたちは、  
アドルフの思考法をきびしく取る、ドイツ・ヨーロッパ  
的志向のメルクル誌によって、あのような野蠻行為の  
根源がどこにあったかを知ったのです) ―つまりわたし  
は取りも直さず、一晩もかけてのろのろと、とりとめも  
なくお喋りするうちに、あいまかわらず人間を、ユダ  
ヤ人を、愛を、真実を、雨蛙を、作家を、赤ん坊を運ん  
でくる鶴を信じるような型の人間なのです。」(『真実、



雨蛙、作家、赤ん坊を運んでくる鶴（一九六六）<sup>64</sup> 自死や他殺すらも結局自然死の圏外には出られないものであるように、詩もまた遂には沈黙の闇に呑み込まれてしまふのか、という疑いや怖れは、絶えず声の裏側に密着しているのである。確かなものはこの暗黒だけであり、不快と苛立ちとだけが、またしても残るとしても、ツエランのとつたのは、アドルノの辛抱強い哲学の歩みとその思考法は異なっても、しかしそれを詩作というかたちで表していく方法だった。彼は一篇の詩を仕上げるのに十四、五ものヴァリエーションを残している。また戦後においても、なお、現実の迫害と被害妄想とに苛まれながら、執着というより、ほとんど執念に近いものとして詩作していたことが、同じくユダヤ系女流詩人のネリー・ザックスとの往復書簡によっても知られる。実際、この一九六〇年代の時期に、両者ともに精神病を病んでいたことその誘因には、戦後も続く反ユダヤ、ネオ・ナチの勢力からの訊問、追跡、あるいは抹殺されることへの極度の強迫観念が関係していたことは、その書簡からも察せられるところである。ある時期において必ず訪れ、また荒々しく過ぎ去っていくあの生命への原始的な恐怖感とでもいうべきものを巧く扼殺するためには、彼が現実から受ける「ユダヤ」であるか否かの（シポレート）<sup>65</sup>（公言葉）の傷は致命的な深さにまで達していた。

#### 四、無のアポリア

過剰なパトスは空無を誘発せずにはおかない。ツエランはこのアポリアのなかに在り続け、その瞑い意識の磁場を極から極へと喘ぎながら這う。詩は絶えず一点に収束しようとする力と、逆に、遙かの無限遠に跳躍しようとする力とによって緊張して震え、次の瞬間には暗黒の中に消失するかも知れず、あるいは虚空へと霧散するか

も知れぬ危機を孕む。詩はただひとつのことを言い切り、かつ同時に全てのことを言い尽くそうとし、寡黙であり、かつ雄弁であろうとし、韜晦に満ちていて、かつ明晰であろうとする。ツエランにとって日常は何かが欠如しているという飢餓感と、何かが無駄であるという飽和感とに満ち、そこには衰弱し枯れていく肉体とそれを激しく消費して、異様に強く煌めく思念とが共存する。だがもうそのようなアンビヴァレントな反復はやめた方がよい。このように果てしなく言いつのつても、ついには何も語るところがないだろう。ツエランはそこにはいない。決定的に彼は自身を解き放つ。彼はその言葉もろともに粉々になることを欲しているからだ。限りなくシタックスを切り刻むことで、言葉の〈灰〉になることを、あるいは〈灰〉の言葉になることを。「なぜ、汲まれなかつたものたちから、／そこでおまえが待たれていたとき、結局、再び／立ち現れるのか？ なぜ／秒たちの債権者が、この狂気の報酬が？」<sup>66</sup>（なぜ、汲まれなかつたものたちから：『雪の声部』）それはちょうど生者のなかで死に、死者のなかで生きているツエランの影に等しい。そも、存在する一切は〈否〉という声を始源的に秘めていたのではなかつたか。すなわち存在の深みから暗く唱えられる声にならない声を。そして詩とは他ならぬこの〈否〉の別名ではなかつたか。

Ich kann dich noch sein: ein Ech, / erststbar mit  
Fühl- / wörtern, am, Abschieds- / grat. // Dein  
Gesicht schaut leise, / wenn es auf einmal /  
lampenhalt hell wird / in mir, an der Stelle, / wo  
man am schmerzlichsten Niesagt. ("Lichtzwang")

わたしにはまだあなたが見える―こだまが、／触れることばで／手探りできる、別れの／尾根に／

あなたの顔がそつとたじろぐ、／とつぜんそれが／ランプのように明るくなるとき、／わたしのなかで、もつとも辛く／いいえが言われるところで。（「わたしにはまだあなたが見える：」『光の強迫』<sup>67</sup>）

その不通に躓きながらも、しかし言葉はそれを信ずべく最後の咎としてツエランによって死守される。「とはいえ詩は、なんとしても、語るものです！ 詩はみずからの日付を記憶しつづける。しかも―語るものです。たしかに詩は、つねにそれみずからの、ひたすらみずからの事柄においてのみ語るものです。」（「子午線」<sup>68</sup>）沈黙への傾斜が急なほど、それに抗う声が鋭く発語され、言葉への不審が強いほど、逆にそれへの執着は激しさを増す。意識の磁場が言葉を捉え始めるとき、彼は詩作の渦の中に巻き込まれ、言葉は彼のなかで「もつとも辛く／いいえがいわれるところ」（wo man am schmerzlichsten Niesagt）へと吸引されていき、その極みにおいて逆に言葉が意識の磁場を捉え始めるとき、初めて彼は詩作から自らを解き放つことが出来るのである。彼の思考はこうして、いわばビュリダンの驢馬から、メールシュトレームへ、またその渦がさらにメビウスの帯へと変貌していく。そしてそのとき、詩はすでに言葉とも実体ともつかぬ何か、それを形容すれば、沈黙の声あるいは暗黒の光輝、あるいはまた非在の実存とでも呼ぶべき何かとして現れる。「現」が現-在するのだ。「ツエランの言語体験の媒体は彼の言語であり、その言語は表現の多様性によって特徴づけられているものである。この言語においては、語の変容が現実の中において生じる。ズールカンブ社に宛てた最後の手紙の中で、ツエランは、自分の最近の詩がますます暗鬱に、外界から遮断されたものになっているという見方に反対している。彼にとつては、これらの詩は自由であり、ひらかれたものであり、終わりの

ないものである、というのである。」(飯吉光夫「訳者あとがき」)詩は本質的に、この不可能なものの可能的表現の試みという逆説のなかにしか生まれ得ないものである。語りかけること、それは遂には不可能であるのだから。だがそれ故にこそ詩は「否」という痛切な祈りを発し続けるほかはない。詩作とはまさに呪縛されたものが自ら呪縛するものへと転移するその試みに他ならない、たとえそれが窮極において自身の無化を希求するものであるにせよ。「詩、それはまた贈物でもありません—心こまやかな人びとへの贈物、運命をはらんで訪れる贈物です。」(ハンス・ベンダーへの手紙<sup>⑤</sup>)自由が運命を逃れた場所にあつたためしはないのであり、運命はただその裡に屹立する者だけに、人間を原始から憧憬させ、かつ苛み続けてきた自由という古い夢の秘儀を告げるのだ。「この世界の／不解説性。すべては二重。／強力な時計たちが／裂ける時刻を正当と見なす、／嘸れ声で。／おまえは、おまえの最奥処に押し潰され、／おまえ自身から立ち昇る／永久に。」(「不解説性：『雪の声部』<sup>⑥</sup>)運命を離脱することでもなく、それを無化することでもなく、ただそれに確実に抗い続けるなかにのみ、自由というすつかり手垢に汚れ果てた(震え)が辛うじて救済されるのである。「もちろん詩は永遠性の要求を出しません。しかし詩は時をとりこえてではありません。／詩は言葉の一形態であり、それゆえにその本質上対話的なものである以上、いつかはどこかの岸辺に—おそらくは心の岸辺に—流れつくという(かならずしもいつも希望にみちてはいない)信念の下に投げこまれる投擲通信のよくなものかもしれない。詩は、このような意味でも、途中にあるものです—何かをめぐらしています。／何をめぐらしているのでしょうか? 何かひらかれているもの、獲得可能なもの、おそらくは語りかけ得る「きみ」、語りかけ得る現実をめぐらしているのです。」(「ハンザ自由都

市ブレイメン文学賞の際の挨拶」一九五八<sup>⑦</sup>)デリダが指摘するように、「詩とは何か」ということを、おそらくそのみを問い続けたツェランにとつて、その純化された(問い)は、「国境とは何か」「民族とは何か」「ユダヤ人とは、日付とは、灰とは何か」という(問い)と、もはや区別することはできない。「日付、灰、そして名前は同じものであつた、あるいはあるだろうということ、そしてこの同じものはけつして現在には繋ぎとめられぬものであるということ」(デリダ)

Wirk nicht voraus, / sende nicht aus, / steh /  
herein: / / durchgründet vom Nichts, / ledigallen  
/ Gebets, / feinfugig, nach / der Vor-Schrift, /  
unüberholbar, / / nehm ich dich auf, / statt aller  
/ Ruhe. ("Lichtzwang")

前もつてはたらきかけることをやめよ、／先触れを送ることをやめよ、／立て／この中に—／無きものに掘り返され、／すべての／祈りをとかれて、／しなやかに、先立つ文字に従い、／追い越すこともならず／わたしはあなたを抱きとめる、／すべての／安息のかわりに。(「前もつてはたらきかけることをやめよ」『光の強迫』<sup>⑧</sup>)

詩集の最後に置かれ、ややもすると、決まって呼び出されては、多少マニフェストじみて解釈されがちなこの詩においても、ツェランは、断念と放棄の匂いを漂わせつつ、決意さえひとつの強迫観念になつてしまうような、衰弱のなかで尖つていく感性を示している。「おもうがままに、のうのと、なしくずしに、ぬけぬけと、生きつつけのはだれか、／なものか? 星のようにふるまい／ぼくらの住みか、痛恨／の奥ふかくきしる軸音、そ

れは／痛恨がまだ心覚にはたらいっているからだ。」(「フリーディブル」『非在者の薔薇』飯吉光夫訳<sup>⑨</sup>)ツェラン特有ともいえるように全作品に散りばめられるS.T.の語群。すなわちStein(石)・Stern(星)・Stunde(時)・Sinne(声)・さらにsterben(死ぬ)・sehen(立)というように、それらの語の細道を辿つて(向こう)の次元が開示される。(「生」らも「死」からもともに陥没した場所に立つことは、「鋤き返す」こと、すなわち(問い)続けることであり、(問われ)続けることであつた。そして詩は何よりもまず自らの存在責任を証すべきものとしてあつた。ツェランは運命に組み込まれるという姿勢において運命を拒絶しようとする。このなし崩しの(「生」となし崩しの(「死」)のなかにあつて最も困難であるのは踏み止どまることであつて、動くことではなかつた。「わたしはあなたを抱きとめる(nehm ich dich auf)」という彼の願望の核心の底で、すでに「あなた(dich)」は重層的であり、限定することは出来ないにせよ、ただそれが「無きもの」であれ、有るものであれ、あるいは自身に向かうものであるとしても、そこには対象への同化、さらに無化の誘惑が強く漂っている。たとえそれが極度の意識化の果てにしかやつて来ないものであるとしても。だがしかし詩は「あなた」に向かおうとするにも拘らず、その意に反して容易に「あなた」に近づくことができずに、その語りかける気持ちは裏腹にますます孤立を強いられていく。詩は幾重にも屈折した道を辿らずには「あなた」に語りかけることができずに、逆に次第に晦渋となり、不通となり、むしろ「あなた」から遠ざかるようにさえ見える。ツェランはこの逆説を、すなわち一見伝わるように思われる言葉ではなく、ほとんど伝わりうとしない言葉にこそ語りかけることができる通路が開かれているという「現在」の逆説を鋭く感受するゆえに、彼は「あなた」に近づくために地下深く暗渠を

穿っていかねければならない。「この対話の空間の中で、はじめて、語りかけられるものがかたちづくられます、語りかけられるものが語りかけ名ざすものまわりに集まってきました。しかもこの語りかけられたもの、名ざされることによっていわば「君」となったものは、このありありとした現前の中へおのれの別のありようを持ちこむのです。詩の「ここ」と「いま」においてなお、しかしに詩自身はつねにこのただ一つの、一度かぎりの、その都度のありありとした現前しかもたないのですが――このような直接性と身近さの中においてなお、このものはみずからにとつての、つまりわたしたちにとつての「別のもの」にとつての、ひたすら、固有なるものをともに語りしめます―すなわち、その時間を。」（『子午線』）相手に通じない部分、流通を拒まれた部分、調和に入っていない部分こそが、そこでは重い意味をもつ。賑やかに上滑りしていく言葉、即座に共同の意志になりうる言葉、他者とコミュニケーションする言葉ですら、それはどんなに伝達しているかに見えても、現代において成り立ち難い共同性というものの逆説的現象である他はない。「詩は「別のもの」へおもむこうとします、詩は別のものを必要とします、詩は対者を必要とします。詩はこのものをたずねあて、このものに語りかけます。／どんな事物、どんな人間も、「別のもの」の姿です。／詩がおのれに出会うすべてのものに対してはらおうとする心づかいには、つまり細部とか輪郭とか色彩とか、あるいは「こきぎみなふるえ」とか「ほのめかし」とかに対する詩のひととき鋭敏な感覚は、思うに、日々その完璧さの度合いを加えていく機械類と覇をきそいあう（あるいは鎬をけずりあう）眼力の成果ではなくて、むしろわたしたちすべての日付を記憶しつづける集中力そのものなのです。／「心づかい」――ここにヴァルター・ペンヤミンのカフカ論からマールブランシュの言葉を引くことをお許

してください――「心づかいとは魂のおのずからなる祈りである」（『子午線』）詩は、現代においては、まずこの速やかな調和あるいは中和傾向に対する拒絶として現れざるを得ず、この拒絶の姿勢においてしか共同性を獲得することはできないのである。すなわち、この拒絶を貫くことによつてしか「あなたを抱きとめる」ことはできない。ツエランの詩作は、現代が自らの手で追いやってたところの二人称性かつ無人称性の再生へ向けた必至の試みである。たとえそれが埋葬への更なる追い打ちかと思ふうほどであろうとも、だがその暗喩は決して自動的に独り歩きしてしまうことはなく、常に未知なるものに対して言葉の気孔を開くことによつてその窒息を免れている。詩は、生命同様、自己完結的に（「諾」と叫ぶ瞬間、まさにその円環で自分の首を絞めてしまうのである。「薔薇は、僕らが諾と否を攪拌していたとき、／テーブルからグラスが砕け散ったために、／僕らがそれを、啜っていたとき、すでに血を流していた――／破碎したグラスの音は、僕らよりも長く闇に包まれる夜の到来を告げている」（『静粛に！』『罌粟と記憶』）

彼の詩は拒むという姿勢において共同性から遠ざかって見えるが、実は、現代という時代と、その深いところで沈黙を共有しているのである。「わたしは見つけます、むすびつけるもの、詩のように出会いへとみちびくものを。／わたしは見つけます、なにか――言葉のように――非物質的なもの、しかも地上的なもの、現実的なもの、円環をなすもの、二つの極をこえておのれ自身に立ちもどるもの、しかも――愉快なことに――熱帯地方をもよぎっているもの。わたしは見つけます：子午線を見つけます。」（『子午線』）決して伝達回路の上には現れることのない沈黙を、ツエランの詩は失語の重さを振り切つて発せられる魂の軋み、吃音であり、内部深く沈殿し固着していく声を再び水面に浮上させ、さらに水面を切つて虚空へ

抛り出そうとする試みである。声は咽喉を垂直に貫いて水面にその波紋を残し、この波紋にその振動の影を見出すことができるが、この紋様をなぞつて安心するのは禁物である。その声は流通言語の水面に解消されるや否や硬直し、失速するからである。「開いた声門、空気の流れ、／母音が、はたらき、／ひとつの／周波数をもつて、／遙か彼方から／認められるものに／濾過される、子音の衝撃。／刺激の防御―意識。／所有できない／私、とまた、お前／／眼や記憶にあこがれ／回転しつづける／商／標／の過剰真実。／／視覚中枢とともに、まだ傷つかない側頭葉。」（「開いた声門」：『雪の声部』）彼の声は未だ言葉にならない呻きと、すでに言葉を突き抜けてしまった歌を同時に響鳴させる。「黒つぐみのつがいが私たちの／傍らにとまつている。／私たちの共同の頭上を／ともに流れていく、白い／転／移のもとに。」（『ラルゴ』『雪の声部』）それは現代が相互に陥んだ関係のなかで久しく心の内壁に塗り込めざるを得なかった沈黙であり、またそこから追放せざるを得なかった歌である。この聞こえない沈黙と歌との共鳴においてツエランは現代の間近に迫ってくる。しかしながらその黒い鳥はつねに震えるさなか捕縛を免れている。「ぼくらは塔だ。その尖端からぼくらの顔がのぞいている、ぼくらの塊りになった石の顔が。ぼくらはぼくら自身よりも背が高い、ぼくらはどんな高い塔よりも高い別の塔だ。そしてぼくらはぼくら自身を眺めわたすことができる。ぼくらはぼくら自身を千層倍も超える。」（「エドガー・ジュネと夢のまた夢」一九四八）後に再び「ストレッタ（迫奏）（Engführung）をも反響させることになる、この、ランボーの『地獄の季節』のなかの一篇、「一番高い塔の歌」という標題さながらの初期の文章は、すでにツエランの詩の命運を告知している。すなわち、その命運とは、〈灰〉になることではなく、その〈灰〉の向こうの〈希望〉で



あった。

Anredsam / war die ein- / flüchtig schwebende  
Ansel, / über der Brandmauer, hinter / Paris,  
droben, / in / Gedicht. ("Lichtzwang")

語りかけることができた、片翼だけで漂っている一羽の黒じべみ。／境界防火壁を超えて、パリ／彼方の、頭上の／詩の／なかの。（「語りかける」ことが…）『光の強迫』<sup>(18)</sup>

〔付記〕

テクストには Paul Celan: *Gesammelte Werke in fünf Bänden*, hrsg. von Beda Allemann und Stefan Reichert unter Mitwirkung von Rolf Bücher, Suhrkamp Verlag Frankfurt am Main, 1983. (以下、GWと略す) を使用した。なお各詩集の原題は次の通りであり、注では略号を用いて示す。"Mohn und Gedächtnis"(MG) 『罌粟と記憶』 "Von Schwelle zu Schwelle"(SS) 『閩から閩』 "Sprachgitter"(SG) 『言葉の格子』 "Die Niemandrose"(NR) 『非在者の薔薇』 "Atemwende"(AW) 『息の転回』 "Fadensonnen"(FS) 『糸の太陽たち』 "Lichtzwang"(LZ) 『光の強迫』 "Schneepart"(SP) 『雪の声部』 本文中に引用したツェランの詩は、飯吉光夫、生野幸吉、中村朝子、金子章の諸氏の既訳を参照しながら、原則として筆者が訳した。その際、無題の詩については、その冒頭の一節のあとに「…」を加えて示している。また詩論については、一部を除き、飯吉氏の訳によった。

注

- (1) GW. II, NR. S. 239.
- (2) GW. III, S. 175. 飯吉光夫訳『パウエル・ツェラン詩論集』、以下『詩論集』と略す。(静地社、一九八六年九月一日) 五一頁
- (3) Ebd. S. 177. 『詩論集』、四八頁
- (4) GW. II, SP. S. 363.
- (5) Theodor W. Adorno: *Gesammelte Schriften Band 6*, Suhrkamp, p.335 (1973)
- (6) GW. III, S. 178. 『詩論集』、四九一五〇頁
- (7) GW. II, AW. S. 31.
- (8) GW. I, SG. S. 171.
- (9) GW. III, S. 200. 『詩論集』、九四一九五頁
- (10) GW. II, SP. S. 349.
- (11) GW. I, SS. S. 85.
- (12) GW. III, S. 170. 『詩論集』、三九頁
- (13) 同右、二五頁
- (14) 同右、九一―九二頁
- (15) 同右、九三頁
- (16) GW. II, LZ. S. 252.
- (17) Ebd. S. 373. なお、フィリップ・ラクーラバルト『経験としての詩 ツェラン・ヘルダーリン・ハイデガー』(谷口博史訳、未來社、一九九七年一月三十一日) 五〇―五一頁では、「経験」と「体験」の相違を(それは森有正の議論の設定の仕方とも比較されよう)次のように述べている。これはヘルダーリンにちなんでツェランが書いた詩「ニュームンゲン、一月」(Tübingen, Jänner)を論じたながら、翻訳の問題に触れた箇所だが、それは同時に「ツェラン詩をあまりにその体験(および出自)へ還元して読もうとする理解の仕方に対する強い反論として読みうる。このことは繰り返し注意されねばならない。「詩が翻訳するもの、それを私は経験と呼ぶことに提案する。ただしこれには条件がある。それは、経験 [expérience] という言葉―ラテン語の experiri、つまり危険を横断すること―を厳密に理解し、とりわけ、なんらかの「体験 [vécu]」ないしなんらかの挿話にものごとを帰することのないように注意するという条件である。したがって経験は Erfahrung ではなくて Erlebnis ではない。私が経験と言うのも、それは、この詩がさうから「ほとばしりてお」ところのもの―眩惑の記憶、つまり記憶の純粹なめまいと言っても同じことなのだ―、それがここではまきしく、詩がみずからを関係づけながらも [se rapporte] 報告することのない [ne rapporte pas] 特異な出来事のさいに場所をもち生じることのなかったもの、起きることのなかったもの、到来することのなかったものであるからなのだ。その特異な出来事とは指し物師ツインマー以来のあなたの訪問の後を追うこの訪問、ネッカー川河畔の塔へのこの訪問のことである。この塔で、ヘルダーリンは、彼の生涯の最後の三六年間―彼の生涯の半分―を生きたことなく生きたのであった。したがって、特異な出来事とは、これを記念し記憶しての訪問のことなのであり、それはまた純粹な非出来事という無形式のうちにあるのだ。」
- (18) Ebd. S. 342.
- (19) Ebd. S. 414.
- (20) Ebd. S. 296.
- (21) 金子章『パウエルツェラン詩集 雪の部位 注釈』(三省堂、一九九四年二月一日) 二二七頁
- (22) GW. II, LZ. S. 321.
- (23) Ebd. S. 411.
- (24) Ebd. S. 386.
- (25) GW. III, S. 197. 『詩論集』、八八―八九頁
- (26) GW. II, SP. S. 390.
- (27) GW. III, S. 181. 『詩論集』、五六頁。この一文は仏語で書かれている。以下の通り。"La poésie ne s'impose plus, elle s'expose."
- (28) 金子、前掲書、二一九頁
- (29) GW. II, SP. S. 406.
- (30) GW. I, NR. S. 222.
- (31) GW. II, SP. S. 369.
- (32) GW. I, SG. S. 199.
- (33) GW. II, LZ. S. 239.
- (34) GW. I, NR. S. 275.
- (35) GW. II, SP. S. 415.
- (36) GW. III, S. 177. 『詩論集』、四七頁
- (37) GW. II, SP. S. 384.
- (38) GW. III, S. 167f. 『詩論集』、三二―三三頁
- (39) GW. II, S. 326.
- (40) Ebd. S. 334.
- (41) Ebd. S. 205.
- (42) GW. I, SG. S. 153.

- (43) GW. II. SP. S. 385.
- (44) この文章は『GW. II』 Paul Celan: *Der Meridian und andere Prosa*, Suhrkamp Verlag Frankfurt am Main 1983 にも収められていない。『詩論集』 五二―五三頁
- (45) GW. II. SP. S. 364.
- (46) Ebd. S. 275.
- (47) GW. III. S. 196. 『詩論集』 八六頁
- (48) ハウル・ツェラン『雪の区域（パート）』（飯吉光夫訳、静地社、一九八五年九月六日）一一一―一二二頁
- (49) GW. III. S. 177f. 『詩論集』 四九頁
- (50) GW. II. SP. S. 338.
- (51) GW. III. S. 186. 『詩論集』 六二頁
- (52) ジャック・デリダ『シボレット―ハウル・ツェランのために―』（飯吉光夫・小林康夫・守中高明訳、岩波書店、一九九〇年三月二七日）一一三〇頁
- (53) GW. II. LZ. S. 328.
- (54) GW. I. NR. S. 276.
- (55) Peter Horst Neumann: *Wort-Konkordanz zur Lyrik Paul Celans bis 1967*, Wilhelm Fink Verlag, 1969, ss. 106-111
- (56) GW. III. S. 198f. 『詩論集』 九二頁
- (57) Ebd. S. 198. 同右、八九―九〇頁
- (58) GW. I. SP. S. 75.
- (59) GW. III. S. 202. 『詩論集』 一〇〇頁
- (60) GW. II. SP. S. 388.
- (61) Ebd. S. 356.
- (62) GW. III. S. 161. 『詩論集』 二二―二四頁 この部分に関しては、表現上、より直接的な影響関係がみとめられるものとして、リルケの『新詩集』の一篇である「孤独な人」（Der Einsame）をあげることができる。
- (63) GW. II. LZ. S. 298.